

子どもと認知症の老人との出会いと別れ
— 内海隆一郎「小さな手袋」、江國香織「鬼ばばあ」の
比較を通して —

**A Child's Encounter with an Elderly Person with
Dementia, and Their Parting:**
A Comparison of Ryuichiro Utsumi's "Small Gloves" and Kaori
Ekuni's "Harridan"

石元みさと

ISHIMOTO Misato

認知症 語り手 教科書教材 児童文学 比べ読み

1. はじめに

近年、認知症の高齢者が描かれる文学作品が非常に増えてきている。それは、法整備が進み、メディアでも認知症が取り上げられ、人々の関心が高まっているからであろう。高齢者への介護、老老介護、認知介護を取り上げた作品だけでなく、子どもとの関わりを描いた作品も多い。

本稿では、そうした作品のなかから、子どもと認知症の老人との出会いと別れが描かれている、内海隆一郎「小さな手袋」と江國香織「鬼ばばあ」を比較し、それぞれの作品の語り手による語られ方や、子どもの描かれ方を検討する。特に前者は20年以上、中学校国語の教科書教材として採録され続けている。そのため、教室での読まれ方も取り上げながら作品を分析する。同じ題材を描き、似たような構成を持つ2作品の比較をすることで、単独で作品を読むと取りこぼしてしまう読みの可能性を指摘し、相違点を見つけることで発見できる読みの深まりについて考えたい。

2. 「小さな手袋」分析

(1) あらすじ

内海隆一郎「小さな手袋」(注1)は、1985年の短編集『人びとの忘れもの』(筑摩書房)に収録されている。1997年に教科書教材として採録され(注2)、20年以上掲載され続けている作品である。あらすじは以下の通りである。

父親である「私」の視点で娘の「シホ」とシホが出会った「おばあさん」(宮下さん)

との短い交歓が描かれる。6年前の秋、シホは小学3年生の10月半ばに、雑木林のなかでおばあさんに出会う。はじめは妖精かと思いが怖がっていたが、次第に打ち解け、毎日のように雑木林に出かけていくようになる。そんなシホを「私」や妻は見守り、手作りの菓子を持たせもする。しかし、11月中旬の祖父の死をきっかけに、シホは突然雑木林には行かなくなってしまう。それから2年半が過ぎ、シホが6年生になったばかりの春に、「私」と雑木林近くの病院に風邪のために訪れた際、おばあさんのことを思い出したシホは看護師である修道女を訪ねてみた。すると、クリスマスプレゼントを用意したおばあさんが、ずっとシホを雑木林で待っていたこと、おばあさんにシホをさがしてほしいと修道女は泣いて頼まれたが見つけれなかったことなどを告げられる。クリスマスプレゼントは赤と緑の毛糸で編まれた小さな手袋であった。不自由な手で時間をかけて編まれた手袋を手にしたシホはおばあさんに会いたがるが、「会ってもしかたありません。もうシホちゃんが誰なのか、わからないんですよ。この一年ほどで急にぼけが激しくなりましたね」と言われる。病院からの帰りに、シホが雑木林へ寄っていきたいと言う。シホの熱を心配しながらも「私」は自転車を雑木林の入り口のほうへ向ける。

(2) 「私」という語り手と手袋の効果

この作品は、おばあさんと交流するシホの視点ではなく、焦点人物である父親の「私」によって語られる。そのため、おばあさんの境遇を推察するような描写（「その病院というのは、キリスト教会が経営している小さな病院である。(中略)入院患者のほとんどはリハビリテーション専門の老人たちである」など）が客観的である。この部分はシホではうまく描写できない、もしくは説明調になりすぎてしまう恐れがある。シホから聞いたことを整理してそれを「私」が語ることにより、導入部分がスムーズになっている。さらに、シホ本人が気づいていないような事柄（「帰宅したシホの髪の毛から、雑木林の枯れ葉の甘い匂いが漂っていた」→匂いが移るほど長時間、雑木林に滞在していたこと）などを示せる。こうしたことは三人称の語りであっても表現できることだが、父である「私」の語りは、三人称の語りよりも“親”という近い距離での描写を可能にする。

語り手である「私」は、おばあさんには直接会ってはおらず、その様子はシホが語ったことの伝聞として読者に示される（「シホの出会った妖精のおばあさんは、この病棟の入院患者だった。しかも、すでに一年以上も滞留しているらしい。脳卒中のために、右手と右足が不自由になっているという。」など）。さらに、「心理描写は少ない」（注3）と断言されるように、「私」はシホの気持ちはおろか、自身の思いもあまり語らない。それは「私たちにはそのときの娘の心に立ち入ることはどうしてもできなかった」といった箇所からもわかる。しかしながら、心理描写の少ないことは翻って、シホや「私」の心情を自由に想像することを可能とし、読みの幅を広げるとも言えよう。

(3) 「手袋」である理由

ここで、タイトルにもなっている「手袋」について考えたい。おばあさんはリハビリのためか、「毛糸人形」をいつも編んでいるという。それは、「一個完成するまでには、普通の五倍も時間がかかる」ものだそうで、シホは熱心にその話を「私」に聞かせる。そのおばあさんが、会いに来なくなってしまったシホへの思いを込めて編み上げたのが「赤と緑

の毛糸で編んだミトンのかわいい手袋」だった。それは、2年半後にシホのもとに届けられることになったが、その際に渡してくれた修道女は「それはね、宮下さんがシホちゃんにないしょで、毎晩少しずつ編んだものなのよ。あの不自由な手で、一か月半もかかって……」と告げる。この部分からは、シホが再び会いに来てくれることを願いながら、おばあさんが不自由な手で編んでいたことが想像できる。そのおばあさんの思いを表すには、いつも作っている毛糸人形よりもさらに手の込んでいて、ほんの少し前まで毎日会っていたその当時のシホを連想させる、サイズにぴったり合うものである必要があったのだろう。したがって編み慣れた毛糸人形でも、サイズに余裕のあるマフラーやショールでもなく、手袋が選ばれたのだろうと推測できる。再び会いたいという気持ちが強く込められたその手袋は、2年半後によくシホの手元に渡ったが、シホの当時の大きさであったそれは、年月が経過したことを残酷にも表すこととなった。かすかなおえつを漏らしながらおばあさんに会おうとしても、「ぼけが激しく」なっており、「会ってもしかたありません」と止められる。そのためシホは、おばあさんとの思い出の残る「雑木林へ寄っていきたい」と「私」に告げ、そこへ向かうことが示唆されて終わる。「小さな手袋」によって、おばあさんとの交流の途絶えたことを改めて突きつけられたシホは、おそらくこのあと雑木林で思い出を噛みしめ、自分の気持ちに折り合いをつけるだろうということが推察される。

以上、見てきたように、「私」という語り手や手袋というモチーフのこうした効果によって、「すごくいい話だと思った」（注4）という感想につながるのだと考えられる。しかし、こうした読みはさらに深く掘り下げることができるだろう。

（4）作為性を隠した「私」の語り

「私」が語り手であることによってこの作品が「いい話」だと感想が挙がると述べたが、この「私」という語り手はかなり巧妙にこの作品を「良く」しようと演出していることがうかがえる。

宮川健郎は（注5）、「小さな手袋」の語りについて次のように指摘している。

語り手は、手袋に出合って、それを編んだおばあさんと娘の雑木林のなかでの交際を思い出し、さらに、娘がそのおばあさんと最初に出会ったときに妖精かと思って恐れたことを思い出したはずだ。ところが、語り手は、そのように思い出した順序では語らず、事柄がおこった時間の順序にしたがって、娘とおばあさんの最初の出会い→娘とおばあさんの雑木林での交際→二年半後の手袋との出会いというふうに語っていく。（中略）語り手である「わたし」が明瞭に存在することによって、作品は、語りものとしての性格をおびている。

宮川が言うように、「私」はその順番を変えて読者に示している。修道女ともすでに会っているのに、おばあさんが「宮下さん」だということはわかっているのに名前が明かさない。つまり、読者に示す情報も制限していることがうかがえる。「宮下さん」ではなく「おばあさん」と示すことで匿名性をおびる。それであれば感情を書かないことも不思議ではない。しかし、「宮下さん」という名前が与えられると、その人自身が立ち上がり、描かれていない思いや行動に読者は思いを馳せることになる。すると、シホが会いに来なくなっ

てしまった歳月を「宮下さん」は一体どんな気持ちで過ごしていたのだろうかという思いが読者に生まれ、障害をおった手で編んでいた手袋に対してもさらに感情移入する。そうなれば、なぜシホは会いに行かなかったのかという思いがわきおこるかもしれない。怒りの感情で読むとこの話は「いい話」には思えなくなってしまうだろう。したがって、読者に差し出す情報を制限し、怒りを引き起こさせるような描写を避けているとも思える。

さらに「私」が語り手であれば、「私」自身が何も行動を起こさなかったことについても描写を避けることができる。祖父の死を受けたあと、シホが雑木林に行かなくなった場面を引用する（以下、下線は執筆者による）。

娘の中で、何かが変化したのを、私は目撃したように思った。実は祖父の死というものが、これほどの衝撃を九歳の子どもに与えるとは、私は予想もしなかったのである。

シホの変化は、そのまま雑木林のおばあさんとの交際にもつながった。東北から帰ってきてから、シホはまるでおばあさんのことを忘れたように雑木林から遠のいた。

それがきわめて自然だったので、私も妻も顔を見合わせてただけでひと言もふれなかった。おばあさんがシホを心待ちにしているだろうことは察せられた。

しかし、私たちにはそのときの娘の心に立ち入ることはどうしてもできなかった。もしかしたら、シホはおばあさんのことを本当に忘れてしまったのかもしれない。そのような自然さだった。

この部分から祖父の死にショックを受けて、おばあさんに会いに行かなく（行けなく）なってしまったシホに、「私」は何も働きかけられずにいたことがわかる。娘の困難をただ見守ろうとしている傍観の態度はまるで、時間が解決してくれるだろうといった放任の姿勢の表れのようにも見える。この「私」に対して、丸山義昭（注6）は『『それがきわめて自然だった』とあるが、実際にはきわめて『不自然』なことである。ここには、娘の内面に立ち入ろうとしない、娘の内面の変化をただ見守ろうとする父親の態度がある。また、『ひと言もふれなかった』から『どうしてもできなかった』への表現の変化からは、『対比』の読みとして、弁解がましい感じが読みとれる」と、何の行動もしない「私」を痛烈に批判している。

また、「私」はシホだけでなく、おばあさんに対しても積極的に関わろうとはしない。おばあさんが不自由な体であり、雑木林のそばの病院に入院していることはシホから聞いており、そのおばあさんが「シホを心待ちにしているだろうことは察せられた」にも関わらずに、である。冬へと向かう季節に、いつものように雑木林で娘を待っている老人がいることに対しては想像力が霧散してしまっている。「察せられた」のであれば、名前がわからずとも病院に連絡を取ることは可能ではないのだろうか。現に、2年半後には「毛糸人形を編んでいたおばあちゃん」というシホの拙い問いかけで「宮下さん」だと判明するのだから。こうした「私」の接し方を「娘に注がれる父親の温かい思い」（注7）、「娘の心に立ち入るようなことはせず、あたたかく見守る父親としての気持ち」（注8）とまとめてしまうことには疑問が残るが、「私」が語り手であるため、何もしない「私」の行動

にも違和感が持たれにくい。

さらに、現在の中学3年生になったシホを前にしているであろう「私」が、この6年前のことを語っていることに対して、「私」だけの思いが溢れているのではないかと思える。なぜ、この別れがあった小学6年生当時に語るのではなく、中学3年生になった今語るのであろうか。たしかに、シホの心情描写がないので、自由に想像できる箇所ではある。したがって、「シホの人生の一つの節目で『父』が彼女のこれまでの人生を振り返って思い出されるのが、おばあちゃんとの出会いと別れ」(注9)、『『父親がなぜ六年前のことを雑木林を散歩しながら思い出したの』かということがすごく気になり始めた。私には、単純に雑木林を散歩していてふと思いついたのでなく、父親が娘との関係を見つめ直しているような気がしてならない。』(注10)といった読みが生まれている。どちらも、おばあさんとの出会いと別れがシホに大きな影響を与えたであろうこととして、シホの人生の節目である中学3年生のこの時期に、「私」が振り返っているからだと考えている。

しかし、ここで注意したいのは、〈今ここ〉で語っているのはシホではなく、「私」であるということだ。シホの「心に立ち入」ろうとしない「私」の語りには、シホの気持ちは書かれていないので、シホがこのことを彼女にとって本当に大きい出来事だと思っているかは定かではない。反対に言えば、重大なことと思っていてほしい「私」がこの節目と自身が感じる時期に語り直しているとも読めるのである。つまりこのできごとは、シホがどのように感じていたかが、わからない父親にとって、「いい話」として記憶されているだけのことかもしれないということなのである。

教科書における、この作品の学習目標には「登場人物どうしの交流をとおして、人と人との触れ合いについて自分の考えをもつ」(注11)ことが挙げられている。しかしながら、これまで見てきたように本作品は、シホとおばあさんの交流が途絶えたこと、シホやおばあさんに関わろうとしない「私」が描かれる、「登場人物どうしの交流」が乏しいディスコミュニケーションの世界ではないだろうか。けれども、それを「私」という父親の語り手が、語る順番や自身の行動、おばあさんの名前などの差し出されるべき情報を選別・制限し、語り直すことによって作為性を隠し、「いい話」として表出することができている。こうした「私」という一人称の語りの効果を考えるには優れた教材であると言えよう(注12)。

3. 「鬼ばばあ」の分析

(1) あらすじ

次に、このようなディスコミュニケーションの世界を子どもがなんとか自力で切り開こうとするにはどうすればよいかが描かれる「鬼ばばあ」について考えてみたい。江國香織「鬼ばばあ」は『飛ぶ教室』(注13)に掲載され、単行本『つめたいよるに』(注14)に収録された。この作品は主人公の時夫に焦点化した三人称の語りで描かれる。以下にあらすじを述べる。

小学4年生の夏、カンけりで遊んでいた時夫は、青屋根の養老院の窓からおばあさんが見ているのに気づく。その養老院には、「ボケてしまった老人」がたくさんおり、「鬼ばば

あがいる」「ハンバーグにされる」といった噂が立ち、子供たちは怖がって近づかない場所であった。しかし、ずっと眺めているおばあさんの名前が「トキ」であることをふとしたやり取りから知り、決心して会いに行く。おばあさんは「待っとったよ」と言いながらルームメイトのゆりこさん、げんさん、ひさしさんを紹介し、冷蔵庫からジュースやアイスを出してもてなす。相撲や古い写真、思い出話などを聞かせてもらううちに仲良くなり、足繁く通い始める時夫の変化を両親はよく思わず、遊びに行かないよう言うが、時夫は反発する。夏休みが半分過ぎた頃、いつものように遊びに行くが、おばあさんは急に「ボケ」てしまっており、時夫は「こわくて、くやしくて、涙がとまらな」かった。しばらく足が遠のいていたが、秋になって、また養老院の窓から見ているおばあさんを見つけ、通い始める。おばあさんは時夫のことを覚えていなかったが、毎回自己紹介からはじめて交流を続ける。冬休み明けに久々に会いに行くと、おばあさんは亡くなっており、最後に会った際の「待っとるよ」を思い出して時夫は泣いた。それから3ヶ月が立ち、5年生になった春、時夫はおばあさんのことをもうめったに思い出さなくなっていたが、カンけりをしていると、ふと青屋根を見上げていることがある。その窓にはもちろんおばあさんの姿はなく、きょうちくとうが芽吹き始めていた。

認知症と思われる老人と子どもとの出会いと別れが描かれ、「小さな手袋」とよく似た構成をもっている作品であることがわかる。時夫に焦点化した語り手は、時夫の心情を細かに描写する。さらに、時夫が持ちうる以上の情報を示し（「キャベツ畑のむこうの青屋根といえは、子供たちにとって、おばけ屋敷もおんなじだったのだ」「まっすぐおばあさんの部屋に歩いていく時夫のうしろ姿を、げんさんは階段の上に立ったままみつめていた」など）、場面の描写に客観性・具体性をもたせている。

(2) 「小さな手袋」との比較

時夫が養老院に行くことを両親はよく思っていない（注15）。その両親による制止や、おばあさんがボケたことを既に知っている同室のげんさんによる「もう、トキさんのところには行くのはやめた方がいい」という抑止に立腹しつつ、会いに行った時夫は、おばあさんの変わり果てた姿を見る。

ドアをあけると、おばあさんは窓のそばにすわっていて、時夫をみても知らん顔だった。（中略）時夫が半信半疑のまま立っていると、とつぜん、おばあさんはかん高くさげんだ。／「トキオッ。トキオじゃないか」／おどろいている時夫にしがみついたおばあさんは、ものすごいぎょうそうで髪をふり乱していた。／「やっみつめたよ、トキオ。もうにがすもんか。ここから出しとくれよお、トキオ。死んでもいっしょだよね。友達だもんね」／ほそくてしわだらけの腕の、いったいどこにこんな力があつたのか、げんさんが入ってきておばあさんをおさえてくれたあとも、時夫はしばらく動けなかった。背中がつめたくてひざに力が入らないのだ。

この描写からは、時夫がかなりのショックを受けたことがわかるだろう。それまでのおばあさんの振る舞いとこのあまりの違いに、恐れ慄き動けないでいる。その後、「やっぱり鬼ばばあだ。みんな鬼ばばあと鬼じじいだ。／『ちきしょう』／時夫は、そうさげぶが早い

駆けだしていた。こわくて、くやしくて、涙がとまらないのだ。目のすみで、きょうちくとうの花がゆれていた。」という語りの示すように、時夫は養老院の部屋から逃げ出す。仲良くなったはずの老人たちが突然、得体のしれないもののように見え、理解の及ばない存在として「鬼ばばあ」「鬼じい」と呼び表す。そこには、あんなに仲良くなったのにという悔しさが込められていることがわかり、時夫のやりきれない悲しさがにじんである。

その後、養老院から足が遠のき、カンけりの日々に戻っていた時夫は、げんさん、ひさしさん、ゆりこさんと一緒に散歩をする知らないおばあさんを見かける。「心臓がとびだしそうにドキドキし、ゆびさきがぞわっとつめたくなった。かくなりたいのに動けない」でいる時夫に、げんさんが、「トキさんは、ちがう部屋にうつった」と教えてくれた。時夫は「ほっとした。何だ、死んだわけじゃないんだ」と安心する。それからというもの、おばあさんが一人でいるのではないかと気になり、頭の隅に引っかかったままでいる時に、青屋根の窓におばあさんの顔がのぞいているのを発見する。その時は遊んでいる最中で、カンけりの鬼であったが、友達から非難を浴びる「オニヤメ」をしてでも、「夢中で走っ」て病室に駆けつける。

「こんにちは」／時夫が礼儀ただしくおじぎをすると、おばあさんもおじぎをした。時夫のことは、まるで覚えていないようだった。ずいぶん小さくなったみたいな気がする。(中略)／「わたしはトキ、いうんよ」／「うん」／「あんたは？」／「時夫」／おばあさんはきょとんと、目をまるくした。／「ふうん。あんた、トキオ、いうんか」／「うん」／「わたしはトキ、いうんよ」／「うん」／時夫は、何度も“うん”をくりかえした。そのたびに、おばあさんはうれしそうににたっと笑うのだった。

「小さな手袋」のシホは、おばあさんに会うのを修道女に制止されると素直にそれに従って会いに行こうとせず、思い出の詰まった雑木林へ向かう。しかしながら、時夫は阻止されそうになっても会いに行き悲しい思いをするが、再び毎日おばあさんと交流するようになる。「ボケ」で疲れやすくなってしまったおばあさんとは、ほんの15分しか会えなくなってしまったし、時夫を覚えていることも覚えていないこともあった。けれども、覚えていなければもう一度「わたしはトキ、いうんよ。あんたは？」というやり取りを繰り返し、関係を構築していく。時夫の接し方には〈覚えていないなら終わり〉ではない関係のあり方が描かれている。相手が自分を覚えていなくても良い、覚えていないのなら、その日限りでも最初からやり直すというあり方だ。時夫は、相手に合わせて接するという精神的な成長を遂げたと言えるだろう。そうすることで、「鬼ばばあ」という理解のできないものとしておばあさんを捉えるのではなく、15分しか会えず、以前とは少しちがう小さくなってしまった存在として受け止める。自分を覚えていなかったとしても、おばあさんが生きている限りは、会いに行くことが可能なのである。時夫は、会いに行く機会を自分で作り出しているのだ。

そうした時夫の行動は、別れへの準備になっていったのだろう。おばあさんとの本当の別れは、冬休み明けで突然ではあるものの、「鬼ばばあ」と表現したときの動けないほどの狼狽している様子ではない。

おばあさんの部屋をたずねると、おばあさんはもういなかった。／「ちっとも苦しませませんでしたよ」／看護婦さんが言い、時夫は頭がぐらぐらした。／待っとるよ、／と言ったおばあさんの顔が目にかんできて、呼吸がはやくなる。／階段をかけおりて、庭をぬけ、目のはじをかすめたのは冬枯れたきょうちくとうだった。つめたい風がふいていた。待ってるって言ったくせに。待ってるって言ったくせに。時夫はへいをとびこえて、マンションまでいっきに走ると、駐車場の車のかけにしゃがみこんで泣いた。

突然の別れに混乱はしているようだが、以前のように「背中がつめたくてひざに力が入らずに「しばらく動けなかった」りはしていない。ショックではあるものの、その場を離れ、「駐車場の車のかけ」という隠れたスペースまで来て泣くという理性を保った行動をとっている。おばあさんの「ボケ」た姿を目にした夏休みの頃とは大きく反応が異なっていることがわかる。そして、3ヶ月後には「おばあさんのことは、もうめったに思い出さなくなって」おり、おばあさんとの別れを受け入れることができたと考えられる。

こうした時夫のあり方は、シホと比較することでその違いが際立つ。この2作品を比べて読むと、時夫の行動はシホにはあり得なかった、“[ぼけ]てしまったおばあさんに面会していたらどうなっていただろうか”ということについて考えさせる。修道女に制止されても面会していれば、雑木林でただ泣くだけではない未来があったかもしれない。時夫のように、その日限りでも最初からやり直すコミュニケーションを取っていたら、それこそ（「私」だけでなく）シホにとっても重大な出来事として立ち表れたかもしれない。そうしたことを比較して読むことで読者に気づかせることができる。

(3) きょうちくとう、カンけり、鬼というモチーフ

また、この作品にはきょうちくとうや、カンけり、鬼が繰り返し出てきており、印象づけられている。その効果について考えてみたい。

きょうちくとうは、「ぼったりと紅い」花が、「眠たそうに咲いて」いる様子や、「ゆれて」いる様子、「冬枯れた」姿や、「芽ぶきはじめて」いる様子が描かれる。夏が旬のきょうちくとうの花を通して、季節の移り変わりを表していることがわかる。またこの花の特徴としては「薬用にされるが、また毒物でもある」（注16）ということが挙げられる。時夫にとって、おばあさんが自分を忘れてしまったことは大変なショック（毒）であっただろう。しかしそこから時夫は、自分を忘れてしまうおばあさんとの接し方を学び、死への理解を深めていった（薬）とも読み取れ、きょうちくとうの象徴性が活かされているといえよう。毒から薬へのあざやかな反転は、最後の場面の「オニヤメ」にも重ねられている。

作品中、時夫はカンけりで友達とずっと遊んでいる。カンけりの鬼であったとしても、おばあさんが見えると居ても立っても居られず、「オニヤメ」をしてでも駆けつける。「オニヤメ」は友達から「何だよ、オニヤメかよ」（傍点ママ）と不服そうに言われる、疎まれている行為である。「オニヤメ」をされると、鬼がいなくなり、カンけりが成立せずに宙ぶらりんのまま放り出されるからだ。

おばあさんの亡くなった場面は、鬼に「オニヤメ」されて遊べなくなった友達たちと同じように、時夫も不意に突き放されたようにも映る。「待っとるよ」と言っていた「鬼（ば

ばあ)」が突然いなくなり、一緒に遊ぶことのできなくなった時夫はその場に放り出された形だ。カンけりの鬼を「オニヤメ」していた時夫が、今度は「鬼（ばばあ）」に置いていかれ、悔しがる。カンけり遊びと同じような一瞬の立場の反転は、毒から薬へ変わる、きょうちくとうのイメージとも重ねられているだろう。きょうちくとうの花のようにあざやかな変化が印象的である。

4. おわりに

「小さな手袋」「鬼ばばあ」という、子どもと認知症の老人との出会いと別れが描かれる作品を比較しながら、その語りの特徴や子どもの描写について分析した。中学校国語の教科書教材である「小さな手袋」は、主人公の娘の親である「私」によって語られることで、子どもの一人称よりも整理された、客観的で三人称よりも近い距離での描写を獲得している。その語りの効果によって、登場人物それぞれの関わり方が希薄な世界においても、差し出す情報や語る順番を選別することが可能になり、小さくまとまった「いい話」になっている。「鬼ばばあ」は、老人に忘れられてしまっても、そこで関係を終わらせない子どもが描かれる。忘れられてしまっても、その都度、厭わずに自己紹介から始めることで、その日限りであっても関係を築くことが可能であることを読者に示す。その子どもを描く際に、「きょうちくとう」や「カンけり」をうまく散りばめながら、老人と子どもの関係性に奥行きを出している。

松本修（注17）は「一つの文学作品に対して、他の文学作品を重ねて読むことにより、それぞれの作品が明確に理解できるようになり、深く考えることができるようになる」として、「比べ読み」「重ね読み」の効果を述べている。教科書教材として20年以上読まれ続けている「小さな手袋」を教室において単独で扱うことはもったいないものであろう。「小さな手袋」「鬼ばばあ」の両作品を、語りやモチーフに注目して比較しながら読むことで、同じように子どもと認知症の老人との出会いと別れを描きながらも、このように読みが異なることを示せる。作品の共通点である、子どもと認知症の老人との出会いと別れという構造を理解したり、相違点である語りから、小さくまとまった「いい話」を、どうしてそのように見えているのか考えたりもできる。大きく異なる、シホと時夫の行動からは、シホが目指せたかもしれないおばあさんとの関係性を見つけることも可能だ。そうした2作品の読みを示していくことで、子どもへの視線の注ぎ方や子どもの行動の描き方の違いに気づくこともできるだろう。比較して読むことの積み重ねは、「すごくいい話だと思った」という表面的な読みではなく、作品自体に批評を加えるさらに深い解釈の多様性へとつながっていくことができるはずである。

注

- (注1) 内海隆一郎「小さな手袋」『人びとの忘れもの』筑摩書房、1985年。本文引用は、『現代の国語2』（三省堂、2016年）による。なお、本稿タイトルの英訳は執筆者による。
- (注2) 『中学校国語1』学校図書、1997年。『現代の国語2』三省堂、1997年。
- (注3) 『中学生の国語 二年』学習指導書 三省堂、2012年、p.126
- (注4) 高間春彦「国語科の授業で、教師と子どもは小説をどう読んでいるか -- 「小さな手袋」の教師と子どもの読みを読者論で分析する」『国語国文学』（43）、2004年、pp.27-35
高間は授業者である自身や生徒のこうした一読後の感想を取り上げ、語り手を変えてリライトさせることで読みが変化したことを紹介している。
- (注5) 宮川健郎「[人情噺]のドラマツルギー 内海隆一郎(三省堂・2年)「小さな手袋」この教材の魅力」『実践国語研究』明治図書、2004年7月号、pp.69-73
- (注6) 丸山義昭「文学教育における「読みの技術」の役割とは何か? (<特集>文学教育の転回と希望-<文脈>を掘り起こして-)」日本文学 57(8)、2008年、pp.43-52
- (注7) 『現代の国語2』学習指導書 三省堂、2016年、p.62
- (注8) 前掲書3、p.126
- (注9) 前掲書7、p.75
- (注10) 前掲論文4、p.29
- (注11) 『現代の国語2』朱書編、三省堂、2016年、p.18
- (注12) この「私」という語り手は、ブースの言う「信頼できない語り手」だと考えることもできるかもしれない。廣野由美子は『フランケンシュタイン』の語りを分析しながら、語り手が信頼できないとされる根拠には、語り手が未熟な場合や表現力と理解力に限界がある場合、意識の流れが判然としない場合、悪意によって物語の流れをねじ曲げている場合などを挙げる。さらに『フランケンシュタイン』の三人の語り手たちも全面的には信用できないとし、フランケンシュタインの「真相を告白したり真の懺悔が求められるべき肝心なところにくると、彼は『言葉では表現できない』という決まり文句で言葉を濁す癖がある。それは、(中略)かえって空虚な詭弁のように響いてくる」(『批評理論入門『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論新社、2005年、pp.25-33)と述べている。「私」の語りも、先の引用した部分で「忘れた」「自然だった」を繰り返し、かえって「不自然」に見えている。
- (注13) 『飛ぶ教室』光村図書出版、1987年11月、pp.11-17
- (注14) 江國香織「鬼ばばあ」『つめたいよるに』理論社、1991年。本文引用は、新潮文庫版(1996年)による。なお、本稿タイトルの英訳は執筆者による。江國香織による認知症の老人を描いた作品は、他に「晴れた空の下で」がある。こちらは高校の国語教科書教材(『新編 国語総合 言葉の世界へ』教育出版、2012年。『新探求現代文B』桐原書店、2018年)として採録されており、「鬼ばばあ」との比

- 較することで新たな読みが深まると考えるが、今回は紙幅の都合上、別稿に譲る。
- (注15) 時夫と両親は、「『こまったわねえ』お母さんは小さくためいきをついた。(中略)『とにかく、養老院にばかり遊びに行くのはよしなさい』それまでテレビで野球をみていたお父さんが言った。『どうして』『どうしてもだ』』というやり取りをする。養老院に毎日通う時夫を両親はあからさまに非難している。しかし、この反応は一般的なものだとも考えられる。何の関係もない、血のつながりもない老人に会うことを積極的に肯定することは現実的ではないだろう。この両親の描き方においても、おばあさんと会うことを肯定していた「小さな手袋」との違いが見て取れる。
- (注16) 「キョウチクトウ」(立花吉茂執筆項目)『大百科事典』4、平凡社、1984年、p.340
- (注17) 松本修「「比べ読み」「重ね読み」の授業」『Groupe Bricolage 紀要』(15)、1997年、pp.2-6

参考文献

- ウェイン・C. ブース著、米本弘一、服部典之、渡辺克昭訳『フィクションの修辞学』書肆風の薔薇、白馬書房、1991年
- 廣野由美子『批評理論入門『フランケンシュタイン』解剖講義』中央公論新社、2005年
- 廣野由美子『視線は人を殺すか 小説論11講』ミネルヴァ書房、2008年

Received : September, 29, 2019

Revision received : November, 19, 2019

Accepted : December, 4, 2019

